

「劇場」国家としての沖縄 上

ガヴァン・マコーマック



GAVAN MCCORMACK 1937年オーストラリア生まれ。オーストラリア国立大学名誉教授。東アジア近現代史、主に日本近現代史。アジア・太平洋地域を中心に世界のニュースや論文を英語に翻訳してインターネットで発信する「ジャパン・フォーカス」代表編集者。同活動で2008年に琉球新報が創設した池宮城秀意記念賞受賞。著書に『空虚な楽園 戦後日本の再検討』（みすず書房）、『属国 米国の抱擁とアジアでの孤立』（凱風社）など

旧体制は崩壊したが、新体制がまだ生みの苦しみの渦中にあり、社会は不安に満ち、極めて流動的であった十六世紀から十七世紀初頭と同じような現象が、二十世紀末から二十一世紀に繰り返されている。過去にも世界帝国の指導者たちによって交易の新ルートが開かれ、新しいアイデアや技術が広まり、それとともに国家が興亡した。

沖繩は薩摩藩にとって、ヨーロッパにとつてのアフリカやカリブ海と同じだった。

はもつと「近代的」、合理的であつたと同時に、不平等で過酷な収奪の制度でもあつた。王国は存続した方法でもあつた。タテマエ

異国を従えているという威信にたがひ、琉球にとつた。かつて文化人類学者のクワット

とホンネがこれほどはつきりた。王はもはや独立国の君主と

見せかけの「独立」演出

政治権力の中心隠す仕掛け

首里そのものが注意深く構築されたステージであり、そこではみんなが俳優であり、王宮の人々は特別出演の役を与えられたのであつた。政治権力の中心を隠す意図で強制された劇場であつた。

一九七二年の米国から日本への施政権返還以後、以前とは違う形の「劇場」が開幕した。目に映るものが事実ではないと言つ格言をあらためて思い起こさせるが、二十世紀から二十一世紀の沖縄に関する公式文書や政府機関は、十七世紀から十九世紀の中国の冊封体制の下で恭順の意を表す琉球と同じようにまつた。当てにならないものであつた。

沖繩は独立国としての日本や平和憲法、地方自治が事実であるかのように演技することを強いられてきた。現実には、主権は部分的に回復したとは言つもの米軍基地は継続され、米

日軍事同盟は沖縄の新憲章となり、事実上憲法に反した超法規的存在となつてきた。沖繩返還は日本が莫大な金額を米国に支払つて手に入れたものであり、返還というより買い戻したものであつた。その上、日本政府は米軍の占領費用を負担し続けている。沖繩の地方自治は琉球王国が独立国の外見を装つた領地として提供された。同じように、空疎なものでしかない。平和憲法の下で沖縄が戦争体制を維持し続けている「劇場」はあまりにも危うい。

三百年の歴史を誇る明朝は内外からの挑戦を前に不穏な状態にあつた。日本は長い戦国時代の後、明朝を倒し、アジアを日本の支配下に置く企てに失敗してから、鎖国政策に転じ、国内の発展のみに力を入れていた。ヨーロッパは興隆期にあり、盛んに世界中に勢力を拡大しつつあつたが、アフリカでは、資源だけでなく人々も奴隷として略奪した。また、北米

の一時の逸脱だつたのではないかと解釈され始めている。資本主義とナシヨナリズムに寄せられたかつての確信は失われてしまった。沖繩は過去と同様、重大な影響を受けることになる。

年忘れがたい年であるとしても、四百年記念を祝う理由はない。交易と文化、外交で繁栄した琉球王国は、その当時めずらしい鉄砲を持つた三千人の薩摩兵の前に抵抗するすべはなかつた。二、三日のうちに王宮は恭順の意を表し、尚寧王と側近は薩摩の捕虜となつて鹿児島に連れ去られた。原始宗教の名残をどめた王宮のしきたりに替わり、薩摩が押し付けた体制

主ではなかつた。一六〇九年以後の沖縄は見せかけのポテムキンの村のような「劇場国家」であつた。実質上江戸幕府と薩摩藩の支配下にあるものの、琉球人は大和の言葉を使つことが禁じられ、琉球の言葉を使うよう命じられた。新しく即位した琉球の王が江戸へあいさつに行く際には、中国の衣服を着るなど異国風を装っていたが、それは幕府にとっては

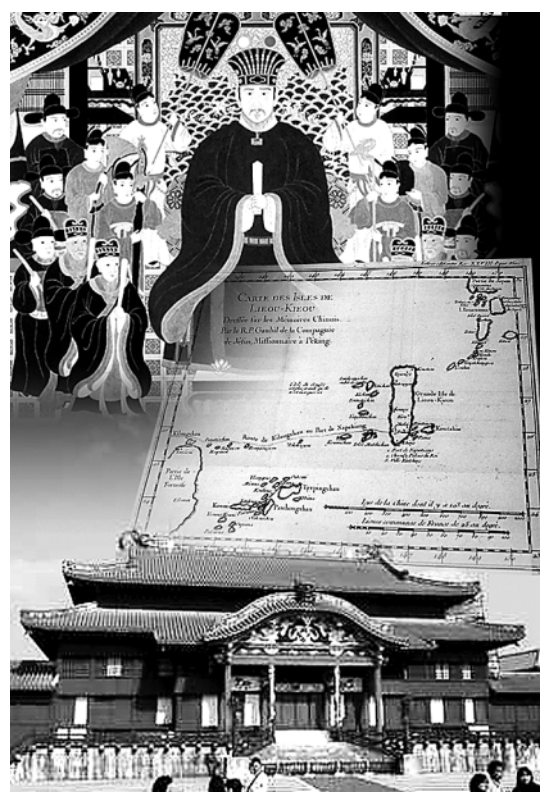
国を「劇場国家」と呼び形容し「劇場国家」という言葉が有名になつたのだが、ギアツは政治権力を誇示するため、儀式や芸能や壮大なショーに特別力を入れるジャワ王国を、そのように表現したのであつて、琉球王国を「劇場国家」と表現すること、ギアツがジャワ王国に使つた概念とはまったく別のものである。

一九七二年の米国から日本への施政権返還以後、以前とは違う形の「劇場」が開幕した。目に映るものが事実ではないと言つ格言をあらためて思い起こさせるが、二十世紀から二十一世紀の沖縄に関する公式文書や政府機関は、十七世紀から十九世紀の中国の冊封体制の下で恭順の意を表す琉球と同じようにまつた。当てにならないものであつた。

沖繩は独立国としての日本や平和憲法、地方自治が事実であるかのように演技することを強いられてきた。現実には、主権は部分的に回復したとは言つもの米軍基地は継続され、米

葉を発し無抵抗だつたと伝えられる。本当にそう言つたのかどうかはさておき、「命どう宝」は沖縄の価値観を表すものと理解されている。尚寧王の薩摩への服従は屈服ではなかつた。物理的に服従は避けられないものだったが、心や価値観まで力づくで勝ち取ることができなかった。

命は何ものにも代え難い貴重なものという認識と強制的な軍事力優先（生命軽視の極端な形が戦争）の現実、また原理主義的資本主義の下で自然の維持や保護よりも自然を収奪、破壊する開発、発展優先の現実という矛盾を掘り下げてみよう。



中国の冊封使が来琉した航路が書き込まれた地図。左は、復元された尚寧王の御後絵。右は、復元された首里城（コラージュ）

十一世紀の沖縄に関する公式文書や政府機関は、十七世紀から十九世紀の中国の冊封体制の下で恭順の意を表す琉球と同じようにまつた。当てにならないものであつた。沖繩は独立国としての日本や平和憲法、地方自治が事実であるかのように演技することを強いられてきた。現実には、主権は部分的に回復したとは言つもの米軍基地は継続され、米

葉を発し無抵抗だつたと伝えられる。本当にそう言つたのかどうかはさておき、「命どう宝」は沖縄の価値観を表すものと理解されている。尚寧王の薩摩への服従は屈服ではなかつた。物理的に服従は避けられないものだったが、心や価値観まで力づくで勝ち取ることができなかった。